

70年余を経た複郭陣地跡と 「慰安婦」の写真

川 田 文 子

目 次

- 第1章 複郭陣地跡と「玉碎場」
- 第2章 「処刑」という名目の虐殺
- 第3章 沖縄敗戦後の第3戦隊

第1章 複郭陣地跡と「玉碎場」

終い焼香の年に裴奉奇さんと死者の谷間へ

裴奉奇^{ペ・ボンギ}さんにはじめて会ったのは1977年12月だった。高知出身の友人に「30年ぶり『自由』を手に 不幸な過去を考慮 法務省 特別在留を許可」と題する1975年10月22日付の高知新聞の記事の切抜きを見せられ、慄然とした。

「不幸な過去」とは、奉奇さんが「慰安婦」として沖縄の渡嘉敷島に連行されたことを意味していた。記事では、「沖縄戦へ強制連行された朝鮮人の証言が、直接得られたのは初めて」であることも明らかにしていた。

奉奇さんに会いに行くまでは、この記事に記された女性の人生をきっちり記録すれば朝鮮と日本、ヤマトと沖縄の近代史が辿れると考えていた。が、奉奇さんと対座した時、そのような観念的、図式的な姿勢ではこの女性の人生を記録することは決してできないことを痛感した。

私は父の出征中に生まれ、両親は無一物で生活を始めたので幼い頃は家が貧しかった。貧困層の子どもや女性が性の売買の対象にされる事象に関心を抱いたのは自らの幼時経験と無関係ではない。だが、自分が経験した貧困と奉奇さんが経験した植民地の貧困は次元が異なっていた。そのことを奉奇さんが発することは、ひとつひとつが語っていた。以来、約5年、奉奇さんの証言を聞いた。当時、「慰安婦」、慰安所に関する公文書は私が知る限り4点しか発見されていなかった。軍が慰安所を設置したことは明らかだったが、詳細は未解明だった。私は奉奇さんが経験したことがらをどのように記録すればよいか分からず、試行錯誤を繰り返した。1987年に上梓した『赤瓦の家——朝鮮から来た従軍慰安婦』（筑摩書房）は、中間報告のつもりで発表した。奉奇さんの凄絶な人生は記録しきれていない。しかし、時間を伸ばしても解決できそうもなかったからだ。

奉奇さんと一緒に慶良間に来た朝鮮女性の足跡は可能な限り辿ったが、奉奇さんが渡嘉敷島にいた1944年11月から海上挺進第3戦隊とともに米軍との武装解除式に臨んだ1945年8月26日までの間、渡嘉敷島で何が起こったか、そのことについては取材していない。気になりながら、長い年月が過ぎた。

慶良間諸島の渡嘉敷島に海上挺進基地第3大隊が駐屯したのは1944年9月9日である。続いて海上挺進第3戦隊が到着した。

奉奇さんら約60人の女性は1944年早春、釜山を発った。下関に着くと、シンガポール行きの輸送船に乗船したが、すぐ降ろされ、入れ替わりに日本兵が乗る姿が見えた。女性たちは門司に移され半年以上待機した。その間に数人は朝鮮で女性を集めたコンドウが営む妓楼で働かされ、数人は逃亡に成功した。

儀同保著『慶良間戦記』（叢文社 1980年）に鹿児島を11月に発ち、20隻

の船団に囲まれ沖縄に行った輸送船マライ丸に約60人の朝鮮女性に乗っていたことが記されている。著者によれば、同著に記さなかったが、朝鮮女性の一部は慶良間に来たという。

奉奇さんら51人は鹿児島から軍の輸送船で10・10空襲後の那覇に来了。焼けた無人の病院でそれぞれの行き先が決められた。那覇に20人、大東島に10人、慶良間の座間味、阿嘉、渡嘉敷に7人ずつである。慶良間にはこの21人以外に「慰安婦」はいなかった。奉奇さんらはマライ丸で那覇に来て、慶良間に向かったに違いない。

沖縄守備軍である第32軍は、米軍の上陸地を沖縄本島南部の西海岸と予想し、背後から米艦艇を攻撃する海上挺進作戦を企図した。慶良間諸島の座間味島に海上挺進基地第1大隊と海上挺進第1戦隊、阿嘉・慶留間島に同第2大隊と第2戦隊、渡嘉敷島に第3大隊と第3戦隊が配置された。900名から1,000名の基地隊は基地構築と守備、それぞれ104名からなる戦隊は海上挺進作戦を担う。戦隊は①とよばれたベニヤ製の小型舟艇に120キロの爆雷2個を搭載し、敵艦船に突進、数メートル手前で爆雷投擲と同時に急旋回して敵艦船から離れる訓練を受けた。しかし、生還はほぼ不可能とみられていた。

渡嘉敷島は慶良間海峡を挟んで座間味島、阿嘉島、慶留間島と向かい合う南北に長い島だ。島のやや北寄りの東海岸の港から続く平地が中心的な集落、渡嘉敷で、役場や国民学校、郵便局があった。港に近い集落のはずれの新築したばかりの民家が慰安所にされた。第三大隊は慶良間海峡沿いの西海岸の渡嘉志久や阿波連の浜に近い山裾に②の秘匿壕を、旭沢に本部を、渡嘉志久に兵舎を築く。兵舎が完成するまでは大隊も戦隊も国民学校や民家に分宿した。

1945年2月中旬、第9師団が台湾へ転戦した。その兵力減を補うため第1～第3大隊の主力は沖縄本島へ移動した。渡嘉敷では勤務隊161名と整

備中隊55名が残り、入れ代わりに下士官、兵13名と朝鮮人軍夫210名からなる特設水上勤務隊が補充された。残留部隊と特設水上勤務隊は第3戦隊の指揮下に入った。

米軍は第32軍の予想に反し、沖縄本島に上陸する艦船の停泊地として慶良間海峡を確保するため、海峡を囲む島々を3月23日から猛攻撃した。B29とグラマンの波状攻撃で軍施設、集落、山を焼き、25日からは艦砲射撃を加え、26日午前8時頃阿嘉に、午前9時頃座間味に上陸した。赤松義次海上挺進第3戦隊長は渡嘉敷への上陸も必至と予想し、地図を見ただけで234高地に複郭陣地（最後の抵抗を行う陣地）を築くことを決定、27日午前2時に旭沢の本部を撤退、第1～第3中隊も逐次234高地に向かった。

渡嘉敷島の慰安所は慶良間空襲が始まった23日に爆撃され全焼した。7人の「慰安婦」のうちハルコ（以下、「慰安婦」の名は源氏名）が重傷を負って死亡、最も若かったミツちゃんとアイコは下半身に重傷を負った。アキコとよばれていた奉奇さん、カズコ、キクマル、スズランは帳場のカネコとともに軍から支給された毛布1枚で弾雨、豪雨を避け、米軍の攻撃が散発的になった4月頃、住民が放置した集落のはずれの仮小屋に入った。住民はすでに山中に避難し、集落の焼け跡には人の気配はなかった。しばらくすると、仮小屋の食料は底をついた。カネコは複郭陣地に交渉に行き、奉奇さんらは軍の炊事を手伝うことになった。谷川沿いに掘られた小さな壕で奉奇さんとカズコ、キクマルとスズランが2人ずつ組んで寝起きした。軍の食料庫は23日に焼けたため米は1日1人当たりマッチ箱1杯、井上利一炊事班長のもとで毎日さつま芋のツルや野草などをわずかに入れた雑炊を作った。

1979年2月にその陣地跡に行ったことがある。奉奇さん、新築してまもない家を慰安所にされた仲村初子さん、慰安所の隣家で軍の酒保（売店）にされた新里吉枝さん、役場の職員で兵事主任だった富山真順さんと一緒

だった。この複郭陣地の山ひとつ越えた谷間で1945年3月28日、渡嘉敷島の300人を超える住民が「集団自決」に追い込まれ、他の場所でも犠牲者が出て、その数は330人に達した。初子さんの両親も妹も絶命した。初子さんも、住民が囲んだ手榴弾があちこちで爆発する谷間に迫撃砲が撃ち込まれ、土に埋もれた。助け出されたのは数日後だ。島の人が「玉砕場」とよぶその谷間に初子さんの足は自然に向いた。谷間の所々に死者への供え物や線香を焚いた痕跡があった。初子さんはつぶやいた。

「去年から今年にかけて遺族が^{うわ}終い^{すうこう}焼香に来ているんですね。終い焼香で死者の魂は昇天するはずなのに、ここで亡くなった人は昇天できずにこの辺をさまよっているといわれるんですよ」

終い焼香は33回忌のことだ。

富山さんは、初子さんが複郭陣地跡から「玉砕場」に向かった時、「えっ、あっちにも行くんですか」と低い声でもらした。富山さんはそこに行くのを渋っているように思われた。

兵事主任は徴兵事務を担う専任の職員である。戦場では軍の命令を住民に伝える役目も負わされた。梅沢裕元第1戦隊長と赤松義次元第3戦隊長の弟、赤松秀一さんが、大江健三郎著『沖繩ノート』の「集団自決」に関わる記述で名誉を棄損されたと著者と岩波書店を訴えた大江・岩波裁判で、富山さんは次のように証言している。

1945年3月20日、赤松隊から伝令が来て住民を役場に集めるよう命令され、軍の指示に従って17歳未満の少年と役場職員を役場の前庭に集めた（17歳以上、45歳未満の青壮年はすでに防衛隊に召集されていた）。その時、兵器軍曹とよばれていた下士官が部下に手榴弾を2箱持ってこさせた。兵器軍曹は集まっていた20数名に手榴弾を2個ずつ配り、「米軍の上陸と渡嘉敷島の玉砕は必至である。敵に遭遇したら1発は敵に投げ、捕虜になるおそれのあるときは、残りの1発で自決せよ」と訓示した。米軍が渡嘉敷に上

陸した3月27日、「住民を軍の北山陣地近くに集結させよ」という軍の命令を伝令が富山さんに伝えに来了。安里喜順巡査らが、渡嘉敷島の北端の、ふだん人が足を踏み入れることのない谷間への集結命令を住民に伝えて回った。

なお、大江・岩波裁判では、27日夜、住民はそれぞれの避難場所を出て、北山の複郭陣地近くに集まり、28日、村の指導者を通じて軍から自決命令が出されたと住民に伝えられたこと、北山陣地から来た防衛隊員が手榴弾を住民に配ったことを、他の証人調書、証言、陳述書で明らかにしている。

高等学校日本史教科書の執筆者であった家永三郎教育大教授が教科書検定について国を相手取った1984年提訴の第3次訴訟でも富山さんは同様の証言をした。

奉奇さんらと5人で北山の複郭陣地跡へ行った時には、軍人や奉奇さんらが寝ていた壕は藪に覆われてよく見えなかった。

「玉砕場」に向かう前、富山さんは複郭陣地跡で炊事場の跡を示した。幅1、2メートルの谷川がいくぶん開けたところだ。

炊事場の近くに谷間から出るけもの道があった。奉奇さんらは夜陰に紛れて斬り込みに出た日本兵が傷を負って、そのけもの道から帰ってくる無残な姿をしばしば見ていた。帰って来ない兵もいた。奉奇さんは、同じ谷間で数か月を過ごした日本兵の死を悼み、しゃがみ込んで手を合わせた。

「私はひとりで来たのではないんですよ。軍に連れられてきたんです」

奉奇さんのそのことばを私は何度聞いただろう。

「沖縄に来なければよかったさねえ」

万感の思いが込められた低いつぶやきも繰り返し聞いた。

植民地の中でも極貧層出身の奉奇さんだが、沖縄に来なければ、「慰安

婦」，沖縄戦，さらに戦後，中部から南部にかけて焼け跡をさすらい，歩き疲れて，その夜寝る場を得，空腹を満たすためにバラック建ての肴^{さかなや}家で酔客に身を委ねる苦難など経験せずにすんだだろう。渡嘉敷島の慰安所に連行されたことが戦中，戦後，奉奇さんが経験した尋常ではない苦難の原因そのものであった。その奉奇さんが日本軍の兵士の死を悼む，その姿を私は複雑な思いで嘯みしめた。

70年余を経た複郭陣地跡

女たちの戦争と平和資料館主催の第10回特別展「軍隊は女性を守らない 沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力」（2012年6月～2013年6月開催）のカタログに海上挺進第3戦隊の本部壕の写真が載っていた。大きなその壕を見たいと思い，30数年ぶりに陣地跡に行った。

写真の撮影者である吉川嘉勝さんは，理科の中学教師，教員研修の職務にも従事し，定年退職後は渡嘉敷の史実を次代に伝えようと尽力してきた。自らの「集団自決」の経験も見学者に語っている。そんな吉川さんとの邂逅は感慨深かった。

2015年2月，術後の体力で山頂の国立沖縄青少年交流の家に近い複郭陣地のあった谷間に降りられるか，不安を抱きつつ渡嘉敷島を訪ねた。

国の沖縄振興交付金の活用で複郭陣地跡は整備されていた。谷間に降りる道は柵が設けられ，一部の壕の入り口は崩れ落ちないようにコンクリートで固められていた。約80の壕が確認できたそうだ（2014年現在）。朝鮮人軍夫や防衛隊員が掘った壕だ。原型をとどめているのは数か所，土砂が崩落したり，水が溜まり，コウモリや湿地を好む生物が生息している壕もあるという。このような湿気の多い壕で奉奇さんとカズコは数か月間，寝起きしたのだ。

初子さんが吉川さんの従姉であることは電話で聞いていた。「玉碎場」

でひとり生き残った初子さんとはきょうだいのように暮らしたという。

仲村家は母屋と裏の道具小屋が慰安所にされた。家畜小屋はそのまま
で、初子さんは毎日豚に餌をやりに行った。軍は住民が慰安所に近寄るこ
とを禁じた。初子さんと、名目は酒保だが、慰安所の待合室代わりになっ
た新里家以外の住民は朝鮮の女性とほとんど接触はなかった。1軒だけ、
朝鮮女性がミシンを習いに行った家があった。

当時6歳だった吉川さんは2、3回、初子さんの後について慰安所に行
ったことがある。島の女性は食糧増産と供出、軍作業に追われ、真っ黒に
日焼けし、口紅をさす習慣などなかった。白い肌の朝鮮女性の美しさに吉
川さんは息をのんだ。島の唐辛子を差し出すと喜ばれ、金平糖をもらっ
た。

慰安所の前の川岸にアダンの林があり、アダンの下のゴミ溜めに捨てら
れた衛生サックの中からきれいなものを選んで持ち帰り、風船のように膨
らませて遊んだ。すると、姉にこっぴどく叱られた。

「もう、汚い、汚い、といってね。あの剣幕はどういうわけかと思
ってね」

ハルコの遺骨が白玉の塔に合祀されたことは吉枝さんから聞いていた。
ハルコの遺骨は新里家の隣、吉川さんの長姉の婚家の土地に埋められてい
たが、白玉の塔を建てる時に、日本兵の遺骨とともに建設用地の裏に運ば
れたという。ハルコの遺骨が掘り返された時、祭祀を司る祝女のろを補助する
神人かみんちゅであった吉川さんの母は神ウムイ（神唄）を唱えた。

白玉の塔には「集団自決」の犠牲者をはじめ、渡嘉敷村出身の戦死者、
戦没者、日本の軍人軍属、計594人が刻銘されている。吉川さんの父も
「玉碎場」の犠牲者の中に、中国で戦死した長兄は最上段の軍人軍属とと
もに刻まれている。

吉川さんは米軍上陸直後の3月27日夜、篠つく雨の中、家族そろって避

難場所を出て北山^{にしやま}に向かった。北山に集まっていた住民は数百人、手榴弾を持った人を囲む円陣が谷間のいたるところにできた。「天皇陛下万歳」三唱をきっかけに爆発音が次つぎに谷間に轟いた。役場に勤めていた16歳の兄、勇助が手榴弾の信管を抜いたが、爆発しなかった。もう1個の手榴弾も同様だった。

「火を燃やしてその中にぶち込め」

父が叫んだ。

その時、母が放ったことばが吉川さんの脳裏に刻まれている。

「勇助、その手榴弾を捨てなさい。あれ、従兄の信秀兄さんは逃げる準備だ。死ぬのはいつでもできる。皆立って、兄さんを追いなさい」

家族全員が従兄を追った。他の住民も後に連なった。

その直後、父は爆撃で即死した。一瞬のできごとだった。防衛隊員だった長姉の夫と2番目の姉、3番目の姉も負傷した。

座間味島の犠牲者も200人を下らない。慶留間島でも53人の住民が「集団自決」に追い込まれた。

30数年前、複郭陣地跡で富山さんが示した炊事場の側の谷川の形とよく似たところがあった。川幅がそこだけ広がっている。現在はその上に橋が架けられていた。炊事場は複郭陣地の谷間の下流に位置していた。吉川さんによれば、橋から下流には壕は掘られていないそうだ。奉奇さんらは日々この橋の側の炊事場で雑炊を作ったのだ。

複郭陣地跡に立ち、壕の数々を見て、70年もの長い年月、それらが残っていたことに私は驚愕した。

「ひもじいのは、弾に当たるより辛いね」

ふっと、奉奇さんがその谷間にいた頃の飢餓状況を語ったことばが浮かんだ。

鳥になって故郷を探して帰りなさいね

知念嘉子さん（1935年生まれ）は吉川さんの姉で、8人きょうだいの7番目だ。

1945年1月に渡嘉志久に兵舎ができるまで、基地隊も戦隊も国民学校や民家に分宿した。嘉子さんの家の1番座、2番座、3番座は基地隊の主計将校ら6、7人の宿舎になった。1番座は客間、2番座はトートーメ（長男が継承する祖先神とその位牌）を祀る仏間である。家族は裏座の2部屋だけで生活した。

「主計は、他にない食料もよく持って来て床下に投げ込んで、玉砂利菓子とかラムネとかもらいましたよ」

慰安所の管理は主計が担当した。奉奇さんは複郭陣地の炊事班では井上利一伍長のもとで働いた。

「利一さん、いましたよ。隣の家庭に掘った壕に、私を抱っこして、落とすよ、って。いつも可愛がられていました」

慰安所にされたのは母の兄の家だ。時どき伯父の使いで慰安所へ行った。臍が火傷しそうなほど熱い芋をザルに入れて腹と両腕で抱えて行き、受付にいるカネコさんに渡した朝、挨拶したのに、廊下に1列に座っていた朝鮮の人たちは嘉子さんに目もくれず、前の人の髪を触っていた。虱取りをしていたのだ。

「なんで、挨拶もしてくれないのかなと思って」

7人の女性たちは、無垢な少女に自分の身を晒したくなかったのかもしれない。

慰安所の隣の新里さんの家には同じ名前の同級生がいたので、時どき遊びに行った。

「女の人たちはいつも泣いてるよって、嘉ちゃんというから、気の毒だなと思っていましたけれど」

家にいた将校らが急にいなくなった。第9師団の台湾転戦による沖縄本島の兵力減を補うため、2月中旬、基地隊は一部の兵員を残して移動した。

「その後ですよ。マルレの兵隊が（「慰安婦」と）いっしょに酒を飲んでいたのは」

渡嘉志久にできた三角兵舎では大勢集まれないので、第3戦隊は月に1、2回、家に来て宴会をした。嘉子さんは宴会を裏座から覗き見した。酔った軍人が灰の入った重い火鉢を持ち上げたら、丸く底が抜けた。軍人は底のない火鉢を首にかけ、朝鮮の女性と踊った。

慶良間空襲が始まり避難していた恩納河原から、27日の夜、北山に向かった。豪雨の闇の中、長い縄を持った役所の人を先頭に皆その縄を握り、道に迷わないようにつながって登った。

朝、ようやく大勢の人が集まった谷間に辿り着いた。雨は上がった。

手榴弾を囲んで座った時は、母は死ぬ覚悟だったのだろう。嘉子さんにいった。

「死ぬのは怖くないよ。周りを見ないで、うつむいてなさい。家族みんないっしょだから」

下を向いて固く目をつむった。が、谷間を震撼させる爆発音と渾然一体となった悲鳴、泣き声、呻き声、死を目前にした人びとが発する声が耳に入ってきた。

「ワアワア、ガーガーする声が聞こえて。あちこちで爆発していましたね。自分たちもあんなになるの、いつかな、と思って。うちらももらった手榴弾は叩いても、信管抜いても爆発しないですよ。周囲はみんな爆発して。ぶっ飛ばされて（木の枝などに）引っかかった人もいる。防衛隊の義理の兄（長姉の夫）が7年、中国に行って、沖縄戦が始まる前に復員しましたからね。その人がやり方わかっているは

ずだけど、爆発しないんですよ。そしたら、マッチを擦りなさいという声が聞こえて、マッチを擦ろうとした時に、母が立ちあがって、捨テレイって。方言で。死ぬのはいつでも死ぬる。人間は生きられる限り生きるんだって。母がそういったら、手榴弾を放り投げて、みんな逃げたんですよ」

一家がその谷間から逃れた後、息子が親きょうだいを、父親が子どもたちを、山に登る時必要だった鎌や鍬、あるいは小刀を使って、それらが無い時は木の枝を折って殴り、殺した。そのような惨劇が起こったことは、父の33回忌の時、兄の勇介に教えられてはじめて知った。

当時、嘉子さんは小学3年生。1年の頃から砲弾が撃ち込まれた時は、両手の親指を耳の中に入れ、両目も他の指で押さえて「伏せ」をする練習を続けてきた。

谷間を離れる時、嘉子さんは父と手をつなぎ、弟は姉に背負われてすぐ後ろにいた。ピューっと音がした。砲弾が近くに落ちる音だ。「伏せ、せい」と父が叫んだ。「伏せ」をした時、背中に大きなものが落ちた。土砂に混じって飛んできた石だと思った。それは迫撃砲で碎かれた父の頭部であったことを知ったのは50年後だ。

「弟は逃げる時、姉におんぶされて後ろで見てるんですよ。弟は6歳。50年も経って、姉さん、覚えてないでしょう。僕は全部覚えてるよ、って。姉さんがね、大きな石が背中に落ちよったというの、あれ、お父さんの頭だったんだよ。血も全部ね、姉さんにかかりよった」

手榴弾の爆発音が轟く谷間に迫撃砲が繰り返し撃ち込まれた。父の死を悼む余裕はなかった。立ちあがって2歩くらい歩いたことは覚えている。その後の記憶はない。意識をとりもどしたのは、4、5日後だ。

一家は大勢の人が避難していた恩納河原に戻った。木を伐り、掘立小屋を建て、ソテツを発酵させ、食料にする準備にとりかかった。発酵の仕方

を誤ると死亡することもある。

長姉は恩納河原の掘立小屋で6月26日、出産した。食糧はソテツと拾った米軍の携帯口糧くらい。親を亡くした幼い子が何人もいた。入れ代わり立ち代わり姉に乳をもらいに来た。

「赤ちゃんは泣いてますしね。あげないとも言えないし、少しずつ飲ませて帰すわけですよ。（母乳は）1人分もないのに。水ばかり飲んでいようなもんだから」

米があれば重湯を作ってあげられたのに、それもないまま死んだ赤ん坊もいる。祖母と両親を亡くした友達がいた。1番上が12, 3歳。その男の子が食べ物を探しに行って地雷を踏んで亡くなった。

後に長姉の家族の家が建てられたが、空き地に壕が掘られており、ハルコの遺骨はその近くから掘り出され、白玉の塔に移された。その時、母は神ウムイを唱えた。

「ごめんなさいね。日本のためにこんな遠いところまで連れて来られて、こんな姿になって。鳥になって空を飛んで、故郷を探して帰らないね。お父さん、お母さん、待ってるから」

ハルコの遺骨は合祀された。嘉子さんは、いつか家族が訪ねてくるかもしれないから、別にすればよかったのに、と思った。親族がハルコの遺骨を探すのはほぼ不可能だろう。軍の機密保持のため、行く先も知らされず慰安所に連行された多くの女性は、読み書きができず、音信不通になっていたから。

ハルコの名は白玉の塔に刻銘されていない。本名不明のためだ。糸満市摩文仁の丘の平和の礎にも「慰安婦」の刻銘はない。

腐乱状態だったハルコの遺体

3月23日、空襲警報が鳴り、奉奇さんが廊下に立つと、隣の吉枝さんが

頭に荷をのせ、乳飲み子を背負い、幼い5人の子を連れて避難する姿が見えた。ハルコは不安げに「早く避難しようよ。早く壕へ行こう」と皆をせかしたが、「昼ごはん食べてから」と、誰も応じなかった。突然、目の前の山から巨大なグラマンが現れ、低空で慰安所めがけて飛来した。奉奇さんは咄嗟に風呂場に逃げた。キクマル、スズラン、カズコもいっしょだった。煙が充満し、天井がきしみ、ものが落ちてきた。慌てて下駄をつっかけ、走って川岸のアダンの下にうずくまった。天地が激しく揺れ、機銃弾が間断なく耳をかすめた。奉奇さんは、いま弾に当たる、いま当たると、恐怖で破裂しそうな身を縮めていた。

米機が去った隙に、川を渡り、向かいの山の壕に行こうとすると、「ねえさーん、私たちも連れてってよう」、最も若かったミツちゃんとアイコが慰安所の前で叫んでいた。2人のもんぺは血で染まっていた。助けに戻る気持ちの余裕はなかった。その時、炊事場に逃げたハルコの姿は見えない。ハルコは炊事場で死んだと奉奇さんは思った。

2月中旬、第9師団の台湾移動に伴い、本島に配置換えされた海上挺進基地第3大隊の隊長だった鈴木常良大尉は慶良間に作戦指導に来た大町茂大佐に随行し、別行動を許されて3月23日には渡嘉敷に来ていた。鈴木隊長は当番兵を連れて慰安所に行き、重傷を負ったハルコを炊事場から外に出したと奉奇さんは後に聞いた。鈴木隊長はハルコを最良にしていた。

ハルコは日本兵に背負われて川を渡る時銃撃され、絶命したとの複数の住民証言がある。

その夜、奉奇さんは国民学校に避難した。足に弾が貫通していたミツちゃんとアイコも来ていた。2人は水を欲しがった。「水は飲ますな」といわれ、手拭いを濡らして口を拭いてやった。2人が泣くと、鈴木隊長が「死んだ者もおるのに、泣く奴があるか」と怒った。そして、帳場のカネコにも、「姪どもたちみんな壕に連れて行ったら、こんなことにはならな

かった」と戒めた。

奉奇さんは24日の夕方、慰安所に行ってみた。焼け落ちた慰安所はまだくすぶっていた。隣の空き地に上半身を覆われたハルコの遺体が置かれていた。

腐乱状態のハルコの遺体を慰安所の隣の空地に埋めたのは第3戦隊の知念朝睦少尉（後に第三戦隊副官に）とK少尉だ。知念少尉は第3戦隊では沖縄出身のただひとりの将校だった。

知念少尉（故人・1979年12月の証言）は、第3戦隊が27日、234高地に移動して1週間たった頃、雨が降ると、白いきものの幽霊が現れるという住民の噂を聞いた。「もし、俺に会えるなら（ハルコの霊が）出て来てくれるだろう」というハルコと仲のよかったK少尉と山を下りて慰安所のあった川の側にしばらく座り、夜中、ハルコの霊の出現を待った。

「K少尉が（ハルコの遺体が）そのままではかわいそうだから見て来るというんで、ふたりで行ったんですね。腐乱状態になって、ひどかったですね。顔はぜんぜんわからなかったです」

奉奇さんは、ミッチャンとアイコとは国民学校で会ったきりになった。

富山さんは、離れ離れになった家族を探している途中、重傷を負った慰安所の女性が小川のほとりの田の畔に放置されていた姿を見ている。大腿部の肉が削がれ、夜までもつだらうかと思われるような重傷を負っていた。その後、渡嘉敷から阿波連へ通じる峠の登り口の大きな壕に収容されていた。さらに座間味島に収容され、引き揚げたと聞いた、そんな記憶がある。

井上伍長は、最も若かったアイコを最良にしていた。空襲が始まったので壕に入ったが、爆撃が収まって出してみると、「慰安所で死んだ者も怪我した者もいる。アイコは負傷して伍長の名前をよんでいますから行ってやってください」、兵隊にそういわれて、住民が作った壕に行った。そこに

戸板に乗せられて運ばれていた。すでに命は尽きているように思われた。住民に早く運び出してほしいといわれたが、他の任務で運び出す時間はなく、その場を離れた。

井上伍長は渡嘉志久に運ばれたミッチャんの姿も見ている。渡嘉志久の山の麓の大きな壕にひとりで置かれていた。井上伍長の助手のモリタという兵隊が懇意にしていたので、軍医に「面倒見てやれ」といわれ、渡嘉敷から渡嘉志久まで連れて行ったのだらうと思った。

赤松戦隊長は、3月26日夜、作戦指導にきた大町大佐を海岸で見送った帰り、まだ、開設されていた医務室に寄り、「慰安婦」を見舞った。そして、27日午前2時、渡嘉志久を撤退、複郭陣地を構築する北山に向かった。

赤松戦隊長は、渡嘉志久の陣地を引き払う直前、安里喜順巡査に住民の処遇を問われ、複郭陣地予定地の裏の谷間であれば、背後は絶壁の海岸線であり、前面には軍が陣地を築くので安全だと判断し、その谷間に行つてはどうかと伝えたと語った（故人・1979年5月のインタビュー）。北山に複郭陣地を築くことは地図を見ただけで決定した。

住民は、慶良間空襲前にそれぞれ、恩納河原など安全と思われる場所に仮小屋を作り、壕を掘り、緊急事態に備えていた。吉川さんは、「玉砕場」とよばれるようになった谷間は大勢の住民が避難できるような安全な場では決してなかったという。住民があらかじめ準備していた避難場所にいれば、被害はずっと少なくすんだ、と。

吉枝さんは家族を探しにきた防衛隊員の夫に「あそこは玉砕するようだから近寄るな」といわれ、土砂降りの暗闇の中、幼い子を連れて登って来た道を引き返している。

第2章 「処刑」という名目の虐殺

渡嘉敷島に強制移住させられた伊江島住民

渡嘉敷島には、5月、伊江島の住民が米軍によって強制移住させられた。

4月16日、伊江島に上陸した米軍は21日には占領を完遂、日本軍が建設した3本の滑走路のある飛行場を使用するため、住民を慶良間や今帰仁に移住させた。その数は、慶良間では渡嘉敷島が約1,700人、慶留間島は約400人に及んだ。

渡嘉敷島の住民は恩納河原などの山間の壕や仮小屋に避難し、焼け残った家々は空家になっていた。その空家に伊江島住民が4、5世帯ずつ割り当てられた。

7月2日、米軍は伊江島住民6人に第3戦隊に投降勧告書を届けるよう指示した。その6人は前進陣地で捕えられた。赤松戦隊長は米軍の投降勧告を拒否、陣地の状態を見た以上、帰すわけにはいかないという理由で6人は「処刑」された。

米軍によって渡嘉敷島と慶留間島に強制移住させられた伊江島住民の収容所跡地で2015年8月2日、感謝の集いが行われた。その集いを控えた7月中旬、安里正春さんを訪ねた。安里さんの姉は、第3戦隊に「処刑」された6人のうちの1人だ。

「渡嘉敷の住民のお世話になりましたけれど、ちょっと複雑な心境
なんですよ」

安里さんにとって、強制移住で約1年過ごした渡嘉敷島は無惨な記憶と対峙しなければならない場である。戦後60年目の集いには参加した。70年目の集いは最後の機会かもしれないと思い、自問自答を繰り返した末、参加を申請した。

安里さんは7歳で移住し、渡嘉敷の国民学校に入学した。安子さんは安里さんより12歳年上で、婚約していた。小学校卒業後、内地の紡績工場で働き、帰って来た時、いそこから台湾に来ないかと手紙で誘われたが、姉は行かなかった。

第3戦隊は6月22日、本部の無電機で沖縄守備軍である第32軍司令部が発信した最後の斬り込みを敢行するとの電報を傍受した。つまり、この時点で第3戦隊は沖縄敗戦を把握している。翌23日には、第32軍の組織的な戦闘は停止された。

曾根清士1等兵が朝鮮人軍夫20人余と、キクマルとスズランを率いて米軍に投降したのは、1週間後の30日だった。

赤松第3戦隊長の「昭和20年11月」付の「渡嘉敷島戦闘の概要」が同戦隊の『陣中日誌』の冒頭に掲載されている。この陣中日誌は、第3戦隊の戦闘詳報と命令会報、海上挺進基地第3大隊の本部陣中日誌と第3中隊陣中日誌をもとに編纂し、1970年8月に発刊されたものだ。赤松戦隊長は「概要」で7月2日、大本営発表の「沖縄本島玉砕の報」を聞き、沖縄敗戦が決定的であることを認めざるを得ず、「我等如何にすべき悲観の中に議論紛々たり」と記している。

この日の『陣中日誌』に、安子さんら伊江島住民の6人の「処刑」と、大城徳安教頭の「処刑」が記録されている。大城教頭は教員の妻とともに渡嘉敷に赴任したが、防衛隊に召集され、食料調達が困難な家族のことが心配で3回、軍務を離れ、家に帰ったことからスパイ視された。

安里さんは語った。

「投降の呼びかけに男3名、女3名と聞いたが……。男だけ行くと、日本軍は信用しないから。女性も連れて行こうということになって、うちの姉が選ばれたわけですね。人選の過程はわかりません」

その後、夜、家に日本兵が来た。

「おやじに、あなたの娘を預かっています、と。寒がっているから毛布か何か持たせてくれといったので、おやじはおかしいなと思ったらしいですよ」

いぶかりながらも父は毛布であったか、丹前であったか、日本兵に持たせた。

姉の死を知ったのは、数十日後である。

第3戦隊は8月15日、故障した無線機で「終戦の詔勅」を傍受し、米軍の放送で投降の呼びかけを受けたが、複郭陣地を撤退し、武装解除式に臨んだのは8月26日だ。

おそらく、その日だったろう。安里さんの父は複郭陣地から下りてきた赤松戦隊長の襟元を捕え、「殺してやる」と殴りかかろうとした。その時、

「米軍が中に入って制止されてですね。法律に基づいて裁判で厳正な処分をするので、米軍に任せてくれといわれたのでひきさがったみたいですけど」

母はやさしくて、おとなしいタイプだ。安里さんは母に1度も叱られたことがない。姉の死を知って後、もともと口数の少なかった母は、悲しみも怒りも胸の内に封じ込めた。

「いや、もう、しょんぼり。ものもいえない状態で、憔悴しきって。私は小さかったですから、親を慰めることもできなくて怒り狂っていましたよ。自暴自棄になって、木に自分のこぶしをぶつけたり。どうしていいかわからないで、ただ、わめいているような状態でした」
母は姉の死から受けた衝撃をいつまでもひきずった。

「時どき唸って。夢かなと思って見ると、安子、安子と呼んで、病弱でもありましたんで、なぜ、呼びに来ないかー、会いたいのにってうなされて。そういうことが何回かありました」

父は各種のメディアから取材を申し込まれたが、ほとんど断った。姉の

死に触れれば母が悲しみを新たにすることが分かっていたからだ。

「父が元気なうちにもっと聞いておけばよかったなと思ったんだが」

安里さんには悔いが残る。しかし、母を気づかう父に姉の虐殺について聞くことはできなかった。

姉は、複郭陣地に向かう時、親には伝えずに行った。木の陰から斬首の様相を見ていた渡嘉敷の住民がいた。父から聞いた話では、姉は、親に何も知らせずに来たので、「刑」執行前に母親に会わせてほしいと懇願したが、聞き入れられなかった。

「あなた方はスパイだから、生きて帰すわけにはいかない。あの世に行って会いなさい、といわれたそうです」

姉はスパイではない。姉の死を知った小学1年の時、強い反感を抱いた。

壕でともに過ごした伊江島の「慰安婦」

儀保武雄さんの前妻ヨネさんは安子さんと一緒に米軍の投降勧告書を第3戦隊に持って行き、「処刑」された。その時、ヨネさんは子を宿していたという友人の話が地元紙に載っていた。取材申し込みの電話に出たのは、武雄さんと戦後結婚し、長年連れ添ってきたヨシさんだった。電話でヨシさんは「慰安婦」のことにも触れていた。儀保さん宅を訪ねると、武雄さんは耳が遠いからと、ヨシさんが取材に応じてくれた。武雄さんは弟といとこに、ヨネさんの妊娠は実母もおばも知らなかった、弟は第3戦隊に向かうヨネさんを見たが妊娠している様子はなかった、なぜ、古い傷を蒸し返すのかと責められたそうだ。友人は妊娠していることを武雄さんが戦地から帰ったら伝えてほしいとヨネさんに伝言されたという。ヨネさんの妊娠にまつわる弟と友人の記憶の食い違いを武雄さんに尋ねるのも、ヨ

シさんに聞くのも憚られ、私はその日、ヨネさんの妊娠については触れず、ヨシさんの話を聞いた。

父はヨシさんが生まれる前に病死、豆腐作りで生計を立てた母のおかげで高等小学校まで通った。卒業後すぐ徴用され、日本軍の陣地堀りをした。10・10空襲後の12月からは田村部隊本部の炊事班で働いた。西江前にあった炊事班の壕では、人ひとりが通れる通路を挟んで8人の「慰安婦」と向かいのベッドに寝ていた。慰安所に来る前は辻遊廓にいた沖縄女性だ。ベッドといっても丸太の上に板を敷いた台で、ごろ寝をしていた。

那覇の辻遊廓は、〈本土〉の遊廓と異なり、辻に売られたジュリと、もとはジュリであった抱え親（アンマーはお母さんを意味する方言）は義理の親子、ジュリ同士は姉妹関係を結び女性だけで維持された。格式の高い妓楼は役人や有産階級の宴会や接待などに利用される社交の場でもあり、実力のある抱え親は元老として辻全体に強い影響を与えた。日本軍は泉守紀県知事に慰安所の設置を要請した。泉知事は「ここは満州や南方ではない。皇土の一部である。皇土の中にそのような施設をつくることはできない」と拒否した。たびたび辻にも要請したが、辻の元老は頑として寄せつけなかった。那覇を焼き尽くした10・10空襲で辻も炎上し、行き場を失なって抱え親もジュリも慰安所に行かざるを得なくなったのである。

伊江島には慰安所が2か所あった。西江前の郵便局と医院だった建物を使用した伊賀隊と平隊の慰安所は10・10空襲で焼けた。田村隊の慰安所は西江前の集落のはずれに10・10空襲後にできた。

8人の「慰安婦」の中にどのような事情でジュリになったのか、本島出身の姉妹ふたりがいた。内地の女性もひとり混じっていた。

「きれいな方。とっても上品でね、あの方は芸者じゃなかったかね。

右手、（肘から先が）切れてなかったんですよ」

左手で器用に縫物をした。住民の間では「佐藤武官の女」とみられてい

た。

塩野曹長は仕事を終わると炊事場に顔を見せて時どき注意事項を伝えた。

「もし、アメリカに捕虜されて、いやなことでもされようとしたら、縫い針を脳の下に刺せば楽に死ねるから、1本持っておきなさい」

あるいは、結核にかかっていた「慰安婦」がひとりいたが、その女性に「近寄らないように」など。その女性は囲いをされていたので、めったに会うことはなかった。

3月上旬、1,500メートルの滑走路が3本あり、東洋一といわれた飛行場が完成した。ところが、10日から日本軍は飛行場を破壊し始めた。米軍に飛行場を使用させないためだ。飛行場建設に協力した住民の労苦は無に帰したが、拘泥する暇などなく、米軍来襲が近いことを知った。

3月23日に空襲があり、28日からは連日続き、艦砲射撃も加わった。

米軍が上陸した4月16日、斬り込み前に森伍長が慰安所の女性たちに話していることがヨシさんにも聞こえた。

「私たちは斬り込みに出たら死ぬ。私はあなた方に自分では手えかけきれんから青酸カリを渡す、そう、いわれていたんですね」

ヤエコという女性は自分で縫った4、5歳くらいの男の子の着物と辻で貯めた赤い紙幣の束を見て、「子どものために苦労して蓄えたのに、帰ることもできない」と泣いた。

「田村隊長の女はいっしょについていて、城山^{ぐすく}の方で亡くなったか……、後は分からんけど。佐藤武官は（内地の）女を私に預けたもんだから、班長がお世話なさっていたけど」

西江前の壕を出て、柴田部隊の壕に向かったのは、その日の夜7時頃だった。炊事班は先輩ふたりと同級生とヨシさんの4人、炊事用の水運びな

ど雑役運搬の青年がふたり、北海道出身の栗山伍長と、東京出身の堀江1等兵、8人が行動を共にした。慰安所の女性たちもいっしょだった。途中で結核の女性が転び、ヨシさんは前を行く人たちとはぐれてしまった。途中で1度、自決しようとガマで爆雷を囲み肩を組んだが、日本兵3人の姿が見えたので、死ぬのは早いと、円陣は崩れた。

柴田部隊の地下壕の上に辿り着いたものの入口が見つからなかった。陣地壕に入れたのは空が白み始めてからだ。陣地壕の入り口付近は惨憺たる状態だった。陣地の前の高射砲は破壊され、飛び散った兵隊らの肉塊が散乱していた。壕の入り口付近は崩れ、中に入ると、ベッドから4本の足がぶら下がっていた。上体は見えなかった。側の負傷兵に聞くと、柴田中尉と大久保少尉の遺体だという。外にあった遺体を部下が運んだのだ。

「(斬り込みに出る時) みんなホロ酔いしてね、行ってるんですよ。お金破って捨てて、家族の写真やら時計やら、(壕の中には) いろんなものがいっぱいだったんです」

爆雷がたびたび壕内に投げ込まれた。大きな陣地だったので、班長が防毒面を探して来てくれた。水で濡らせば手拭でも多少防げたが、水はなく、「慰安婦」たちはただ乾いた手拭いで鼻と口を覆った。

入口に放置された遺体が放つ悪臭が壕内に漂っていた。

柴田部隊の壕に入って15日ほど過ぎた頃だろうか。母が迎えに来た。班長が「これたち殺すのも、ちょっと苦勞である」と話していたと聞いて、母は心配して迎えに来たのだ。それで、北海岸の泉の近くの自然壕に移った。渡嘉敷に向かったのは、5月25日頃、米軍による強制移住の最後の船だった。

渡嘉敷では約1か月、米軍の洗濯班で働いた。慰安所にいた女性ふたりもいっしょだった。その後、洋裁部に移り、アメリカの生地子どもにワンピースなどを縫ってあげた。バレーや運動会をしたり、正月には琉球舞

踊に興じ、田植えや稲刈りもした。

第3戦隊が山から下りてきた8月26日には学校の運動場へ武装解除式を見に行った。日本兵の捕虜、朝鮮人軍夫の捕虜、住民が別々に並ばされていた。日本の将校はピシッとした軍服を着ていたが、朝鮮人軍夫は人絹（合繊）のようなよれよれの服だった。やせ細って、中には下痢でズボンを汚している軍夫もいた。

「とっても気の毒だったんですね。洋服汚している方もいたんで」

食料不足が深刻だったため、口減らしに朝鮮人軍夫が殺されたという話を後に洋裁部で渡嘉敷の住民から聞いた。

伊江島に帰れたのは2年後だ。放っておいた畑のニンジンが大根のように大きくなっていた。少し落ち着いた頃、柴田部隊の壕に行ってみた。「慰安婦」たちの白骨化した遺体が例のベッドの上に並んでいた。着衣は乱れていなかった。青酸カリによる覚悟の上の「自決」だったのだろうとヨシさんは感じた。

朝鮮人軍夫の行方は？

トラックでカツオ漁の船長をしていた中村俊子さん（1932年生まれ）の父親は、光徳丸という漁船ごと徴用され、爆撃されて亡くなった。そのため母は1944年に6人の子を連れて渡嘉敷に引き揚げてきた。慶良間空襲以降、男手のない一家は仮小屋も建てられず、他の家族が住まなくなった壕を見つけ転々とした。現在、ダムのあるところから山をいくつも越えて行った上流の壕に避難していた時のことだ。男たち3人にそれぞれ穴を掘らせ、自分が掘った穴の前に座らせて、軍人が後ろから斬るのを見た。谷川の下流の方に住んでいた人から、伊江島の人が渡嘉敷の人たちを助けに来ているという話を聞いたので、殺された3人は伊江島の人だと思った。

だが、第3戦隊が「処刑」した伊江島住民は男女6人だ。

伊江島の野原正徳さんは、渡嘉敷島で両親の他に2、3人の人と山の向こうの北の海に貝を採りに行く途中、偶然、遺骨を拾いに行く人たちに会い、一緒に山を登った。虐殺された後、放置されていた犠牲者の遺族たちだった。第3戦隊はすでに島を去っていた。

数年前、渡嘉敷に行った時、国立沖縄青少年交流の家の側から眺めたが、第3戦隊の陣地の谷から西に上った山だと思う。頂上にまばらにしか生えていない高さ3メートルくらいの本の根元に白骨化した遺体がひとりずつ縄でくくられていた。立っていたか、座った姿勢であったか、記憶は定かでない。根元にくずおれていたように思う。遺族はきものなどから自分の家族の遺骨を見定めた。野原さんらは途中でその場を離れた。潮が満ちれば、貝が採れなくなるからだ。

犠牲者6人のうち、5人は顔見知りだった。男性は40歳と30歳くらい、ひとは知らない人だったので他所から来た人だろうと思った。女性は20歳くらいだと思った（実際は3人とも10代）。

「俺の考えではね、鉄砲でやると音が聞こえるから、聞こえないように、餓死させたんじゃないかなと思った」

第3戦隊の陣中日誌の7月2日の項には「自決を勧告す女子自決を諾し斬首を希望自決を^{ママ}抱助す」の記録がある。

『沖縄県史10 沖縄戦記録2』（1975年 沖縄県）で、知念副官は次のように証言している。米軍からの投降勧告書を持って来て第3戦隊に捕えられ「処刑」された伊江島住民6人のうち、女性1人が生きかえって逃亡した。その女性が捕えられると、N大尉に逃したのは「お前だろう」と疑われた知念副官は、再「処刑」を命じられた。女性は首に傷を負い、頭がぐきりぐきりと小刻みに震えていた。破傷風にかかっていたのだ。女性は観念し、銃殺を要望したので、短銃を使った。

知念副官が再「処刑」した女性は首に傷を負っていたという証言からも

伊江島の男女6人は斬首され、生きのびた女性ひとりが知念副官の短銃でとどめをさされた。

なぜ、野原さんが見た白骨遺体は木に縄でくくられていたのだろうか。木にくくった人を背後から斬首したとは考えにくい。一方、数か月のうちに遺族は渡嘉敷の人から場所を聞いて遺骨を拾いに行っている。その情報が誤りであったとも思えない。

疑問は残るが、餓死させたという野原さんの推測が生々しく脳裏に残った。ヨシさんが渡嘉敷の人から聞いた軍夫が口減らしのために殺されたという噂も気になる。

知念副官と赤松第3戦隊長は口をそろえるかのように8月26日、第3戦隊が山を降りた時点では朝鮮人軍夫はいなかったと証言した。6月30日、曾根1等兵、朝鮮人軍夫、ふたりの「慰安婦」が米軍に投降した時、朝鮮人軍夫は一斉になくなったというのである。曾根さんの証言ではいっしょに米軍に投降した朝鮮人軍夫は20人余だ。陣中日誌に記録されている軍夫の戦死は3月27日、6名、3月28日、5名、4月15日、8名の計19名である。逃亡は人数は不明だが、5月28日にもみられる。

以上の他に6月26日、陣中日誌に3名が恩納河原で住民に糧秣を強要したとの記述がある。その日のことと推測される知念副官の証言を前出の『沖縄県史10 沖縄戦記録2』から引用しよう（筆者とあるのは同著の筆者である）。

知念 朝鮮人は陣中日記にもあるように、いち早く逃げ出し、米軍に投降しました。しかし中には、逃げ出したが、米軍に投降しない者がいて、その連中は村民からものは盗んで食うし、強姦はするし非常に危険な存在になっていました。

筆者 食糧を盗んだり、強姦事件もありましたか。

知念 村民からそのような報告を受けていました。赤松隊長の命令で私は討伐隊を編成して搜索をしていました。村民の通報で海岸にひそんでいる3人の朝鮮人を捕え、私は「おまえたちの名誉にかかわることは一切公表しない。靖国神社にも祀るから……」と説得して斬りました。よろこんで死にました。

筆者 村民の要請は村会か常会かの決定によるものですか。

知念 いちいち村会か常会にかけるとはなりません。個人的なものでした。おそらく強盗も強姦もしなかったでしょう。

知念副官は屋嘉収容所で「処刑」した3名と戦死した7名の遺骨と朝鮮人軍夫の名簿を杉本という朝鮮人に渡したという。知念副官はこの3名の「処刑」について「私がやった」と証言している。だが、陣中日誌にその記録はない。「処刑」されたが、戦後、編纂された『陣中日誌』には記録されなかった朝鮮人軍夫の「処刑」の1例だ。

6月30日、第3戦隊を去った曾根1等兵らの搜索隊に22名が編成され、出発したが成果はなく、7月4日、知念少尉以下10名が再度、搜索に出、5日に河崎軍曹以下7名が逃亡者4名を捕え、搜索が打ち切られた。陣中日誌に4名の処遇については記されていない。

ヨシさんは、第3戦隊が山から下りてきた日、武装解除式に参列した朝鮮人軍夫の一団を見た。2月中旬、第3戦隊には210名の朝鮮人軍夫が配属された。このうち記録や証言で辿れたのは数十名にすぎない。曾根1等兵とともに朝鮮人軍夫は一斉にいなくなったという赤松戦隊長と知念副官の証言通り受け止めれば、百数十名もの朝鮮人軍夫の米軍投降が成功したことになる。赤松・知念両将校のことばの裏には明らかにしたくないいくつかの事例があったのではないだろうか。

赤松戦隊長は武装解除した日のこんなエピソードを語った。

「武装解除の交渉に行く時に民間の方、いくらか連れて行ったかで、その中に女の方がおって、（米兵が）口笛ピューピュー吹いたのはよく覚えている。駐在と小学校の校長と女子青年団長がいっしょに行ったんですわ。女の方は女子青年団長しか記憶にないんですが、『慰安婦』がいたかもしれない。とにかくまあ、口笛拭かれて。軍の中に女がおったというので」

奉奇さんとカズコは第3戦隊とともに武装解除式に臨んだ。ヨシさんはその時、古波蔵容子女子青年団長が、ハンカチを取り出し、悔しそうに歯で喰い千切るのを見た。

大徳安の「処刑」

伊江島の住民6人が虐殺された7月2日、もう1件の「処刑」が執行された。渡嘉敷の国民学校の教頭であった防衛隊員、大城徳安に対するスパイ視による「処刑」だ。

『沖縄県史10 沖縄戦2』に掲載された知念副官の証言では大城徳安の妻は妊娠していたと記されていた。父親が「処刑」された時、母親の胎内にいた子は、どのように父親の死を受け止めているのだろうか、取材を申し入れた。息子であるAさん（匿名希望）にとって私の電話は唐突だったろう。だが、「僕は幼かったですから事実関係はあまり知りませんがね、それでよろしければ、いいですよ」ひるむことなく凜とした口調で応じ、会う約束をしてくれた。

Aさんは1943年生まれ、それぞれ3歳違いの3人きょうだいの末っ子だ。父が「処刑」された時、母の胎内にいたのではなく、2歳近くになっていた。

沖縄では芸達者な人は「芸もち」といわれる。

「徳安は村でも芸もちで、三味線弾いたり、踊ったりして、場を盛

り上げたりする、陽気なほうだったらしいです。それで、身体が大き
いから大徳安といわれていたそうです」

Aさんは、きょうだいの中で1番背が高い。ぐんぐん大きくなったAさ
んを見て、母はよく「お父さんが生きてたら喜んだだろうに」といいてい
た。次第に父に似た体型になる息子に母は記憶の中の父を重ねたのだろう。

父が渡嘉敷の国民学校に赴任したのは1942年頃と母から聞いた。母も教
員だった。Aさんは一家が渡嘉敷に来た翌年に生まれた。

海上挺進基地第3大隊は第32軍の方針に基づいて、1944年10月、17歳か
ら45歳の70名の青壮年を防衛隊に召集し、兵隊といっしょに国民学校に宿
営させた。

前出の『沖縄県史』では沖教祖の資料によるとして、沖縄戦で14名の教
頭が死亡したが、防衛隊や兵隊になった教頭や校長は大城教頭ひとり、40
歳を過ぎての召集も異例と記している。

同著で知念副官はこう述べている。

「那覇から赴任したばかりで間借生活をし、まだこの生活になじ
んでいなかったといいます」「戦争状態になると、土地も食料の蓄え
もない母子に、村の人たちが分け与えた生活をしていたといいます。
それが続くはずがありません。妻子の窮状を聞いた訓導は、逃げて妻
子のもとへ帰りました」

『陣中日誌』の7月2日の項には、「防衛隊員大城徳安数度に亘り陣地よ
り脱走中発見、敵に通ずる虞ありとして処刑す」の記録がある。

軍も住民も食料が払底した状況下、食料入手が困難な妻と3人の幼い子
を心配して家に帰った元教頭が、「敵に通ずる虞」を理由に「処刑」され
たのだ。

父が第3戦隊に殺害された時、2歳未満だったAさんは父の顔を知らな
い。家には父の写真はなかった。姉や兄と父のことを語り合うこともなか

った。

「姉も幼い頃の記憶しかないんだし。思い出があれば語れるんだが、思い出何もないから、語れるわけがない」
母から父の悪口を聞いたことがない。

「母は父に対して、尊敬する、そういう気持ちがあったんでしょうね」

子どもの頃、「お前の親父はスパイだったそうだな」といわれた。

「これが1番嫌だったですね。でも、僕も気丈な人だから、そんなこと知るか、と。スパイとして殺されたのは何千名もいるでしょ。沖縄ではね」

スパイではないと、母から聞いていた。「立派なお父さんだったよ。お前たちに会いに来たんだよ。たいへんな家族思いの人だったよ」と。

「ガマ（自然壕）の中では蛇もいるしね。子どもは小さいから、蛇が来ないように母は寝ないでパンパン（音を出し）続けたとか。そういう状況だったので、父が心配して会いに来たらスパイということで父が日本軍に殺害されたことを聞いたのは小学生の頃だ。

「非常に怒りを覚えたことを記憶していますよ」

どこで聞いたのか、誰から聞いたのか、記憶は定かでない。

「たぶん、母からだったと思う。銃殺されたそうですね。銃殺ということを知っています。木に縛って。もう、戦争終わって7、8年になって、社会も前向きに生きようという時代で、周囲は過去のことは忘れて、未来に向かってという雰囲気の中でね、ちょっとした話の中で（父の話が）出たと思う」

海上挺進基地にされた慶良間は、特攻艇⑨による秘匿作戦が外部に漏れることを防止するため、許可なく島へ出入りすることは禁止され、その取締りは厳しかった。敗戦後も島外との往来は困難な状況が続いた。

「慶良間で戦争が終って、本島に帰る時は船もなくて、密出国という感じで出てきたと母がいていましたよ。夜、本島に逃げて行くんですけど」

母は船が出るという情報を得ると何度も交渉したが断られた。ある日、意を決して船が着くと同時に乗り込んだ。

「漁船をちょっと大きくしたようなものじゃないでしょうかね。降りなさいといわれても子ども3名を抱き寄せて、かばっていたよ、と。海に落とすといわれて、それでも3名を抱いてね。父もいない。その船の知合いしか乗せていない。最後は仕方ないということで、糸満まで連れて来たと話していましたね」

Aさんの母は不条理な夫の死をどう受け止めていたのだろう。母にとっては、承服しようのない日本軍による虐殺である。

「でも、沖縄の場合は、不幸になったのひとりじゃないからね。それでみんな相殺されて。被害がないという家庭はないですから。周囲がみんな戦争の被害者ですから」

敗戦当時、短期間の講習を受けて代用教員になった教師が少なくなかったが、母は首里の師範学校を卒業した。戦後の地域社会で行事がある度、母は周囲の人に求められ中心的役割を果たした。

「母は村ではリーダーでしたよ。リーダーだけどね、バカにされてはいたの。あの頃、母子家庭はバカにされてる。そこで、僕は反骨精神が……。あの頃、教員は月給は少ないですからね。イモばかり食べたのを覚えています」

中学生になった頃から、「母は金もないのに、よく大学に行けというなあ」と、感じていた。大学進学率が低かった当時、母はやりくりし、娘も息子も進学させた。きょうだいは3人とも教師になった。

母が父の遺族年金の申請をした時、他の遺族に比べ、手間取った。第3

戦隊による「処刑」は、公的には戦後までそんな形で顕れた。

Aさんは30代後半になる自分の娘や息子には「大徳安」の死を語っていない。

「不思議な感覚ですよ。私は軍に対して憎しみを覚えているのに、自分の子どもに話すという気持にはならないんですよ」

記憶が残っていない幼い頃に起こった、納得の仕様のない父の異常な死について、身近な者であればあるほど容易には伝えられない、そんな心情が伝わってきた気がした。

20人余の軍夫とキクマルとスズランを率いて米軍に投降した曾根清士さんは1983年にインタビューした時、大城教頭の「処刑」について、こんな話をしてくれた。

米軍投降前、大城教頭が汗みずくで水の浄化装置の手押しポンプを終日、押し続けている姿に接した。「友軍は島を守るどころか、島民を苦しめてばかりいる。戦争が終わったらこの事実を訴えてやる」大城教頭がもらったことばを戦隊幹部に密告した者がいた。水を浄化する重労働は、軍批判に対する報復であり、見せしめだった。

その頃、複郭陣地を囲む稜線上の監視哨が次々に狙撃され、第32軍が敗北した翌24日には勝利を誇示するように、艦砲、高射砲、迫撃砲が撃ち込まれた。陣地付近が集中的に狙われるのはスパイがいるからだ、スパイ探しが始まった。真っ先に大城教頭の家が搜索された時、アメリカ製の缶詰やたばこ、レーションとよばれた米軍の携行口糧などが発見された。稀に特攻機が米輸送船を撃沈すると、海岸に様々な物資や食料が漂着した。兵隊も住民も食料を拾いに行き、飢えをしのいだにもかかわらず、大城教頭の家で米軍の食料が発見されたことがスパイ容疑の証拠とされた。

曾根さんは、厳しい拷問を加えられ、大城教頭が苦しみの余り呻き、悶絶する姿を見た。死には至らなかったが、大城教頭が舌を嚙んだことか

ら、スパイ行動を白状する意思がないと見なされ、茶畑陣地に連れて行かれて「処刑」されたと、後に聞いた。

大江・岩波裁判での知念副官の証言を岩波書店編『記録 沖縄「集団自決」裁判』（岩波書店 2012年）から引用しておこう。

「アメリカ軍の捕虜になって逃げ帰って来た2人の少年が、日本軍に捕えられ、赤松大尉に、皇民として捕虜になった君たちはどのようにしてその汚名をつぐなうかと、折かんされ、立木に首をつって死んだことは間違いなく、当時軍は捕虜になること自体を許さなかった。また、同じく（『沖縄県史10』の）記述中にある伊江島の女性の処刑、朝鮮人の処刑、大城徳安訓導の処刑はいずれも赤松隊長の口頭の命令によるものだった」

第3章 沖縄敗戦後の第3戦隊

戦死より、戦病死より多い栄養失調死

『陣中日誌』には、7月10日以降、11名の栄養失調による戦病死が記録されている。

7月10日、20日、27日、28日、8月1日、4日、7日、10日（2名）、13日、それぞれ名前と所属部隊、階級を記した後に「栄養失調のため戦病死す」の文字が続いている。

7月10日以降の「戦死」者は6名、一般の「戦病死」者は3名だ。戦死者より、戦病死者よりも栄養失調死による死者の方が多い。

8月11日、第2中隊勤務隊の上等兵が行方不明になった。13日には第3中隊下士官2名が「敵陣へ斬り込むとの遺書を残し脱走」した。

第3戦隊が、住民の米軍投降の前兆を把握したのは11日だ。郵便局長らが「渡嘉志久付近の稜線に於いて敵の潜伏斥候に捕えられたる模様」の記述がある。12日未明、幼老な者を残し、恩納河原などの避難場所から多数

の住民が退去、「数日来より東部海岸の谷間に住民続々と集結、異常な状態となりなにか敵に通ぜしものあり」と記している。村長ら村の有力者は、8月20日までに全住民を投降させることを米軍に約束していた。13日午前10時、住民は米軍の上陸用舟艇2隻に乗せられ東部海岸を離れた。

そして、8月16日、第3戦隊は、「陣地各所に敵軍よりの投降勧告文書を散布」した住民を逮捕、その1部の住民を「処刑」した。

当時、小学校3年生だった与那嶺英吉さんによれば、その日、山に上って行ったのは、4人である。帰って来たのはふたりだけで、父、与那嶺徳さんは帰ってこなかった。数え46歳だった父は辛うじて45歳以下の防衛隊召集を免れた。3月末、北山へ集まるようにという伝令がまわって来た時、祖父母、両親、きょうだい、家族9人で北山に登って行き、28日には「玉碎場」にいた。母が手榴弾に当たったが、命に別状はなかった。その後、山中の仮小屋で避難生活をし、敗戦間際に米軍に投降した。その時、祖父母を仮小屋に残してきた。父は祖父母を迎えに、16日に山の仮小屋に向かったのだ。

父は祖父母を迎えに行ったまま、なかなか帰ってこなかった。第3戦隊が複郭陣地を撤収し、捕虜収容所に収容されても、帰らなかった。親戚が捕虜収容所に父のことを尋ねに行ったが、日本兵に会うことができなかった。第3戦隊が島を去ってから帰らなかったのも、不安は次第に大きくなっていった。

父の遺骨が発見されたのは、中学1年の時だ。山に薪を取りに行った人が鍬を使うような場所ではないのに、鍬が放られていたので不審に思い、掘ってみると、ふたりの遺骨が出てきた。父はいつも皮の帽子を被っていた。その帽子と皮のベルトが父の死がゆるぎないことを示していた。

住民が持っていた投降勧告ビラの内容をもとに、第3戦隊は全将校で協議し、米軍に軍使を出すことを決定した。17日、4名の軍使が米軍と会見

し、「大東亜戦争は終結、連合軍に降伏した」ことを認め、戦隊長が米軍司令官と会見することになった。18日、赤松戦隊長は整備隊長である木村中尉以下11名と米軍に会見、停戦協定を締結し、26日、無条件降伏に至った。

第3戦隊は、「終戦の詔勅を傍受」した翌日、「処刑」という名目の住民虐殺に三度手^{みたび}を下しつつ、投降勧告ビラの内容をもとに米軍に軍使を送ったのである。

「僕らの小学校の教頭先生も殺された。人間扱いしない。戦争が終っているのに、なんで住民を殺すのか」

2008年にそう語っていた与那嶺英吉さんに、2015年はじめ、再度話を聞きたいと思い、連絡したが、亡くなられていた。

赤松元第3戦隊長へのインタビューは、渡嘉敷島の慰安所について聞くことが目的だったが、「集団自決」に関わることに自ら触れた。前述した安里巡查に住民の処遇を問われ、複郭陣地予定地の裏の谷間に集まってはどうかと伝えた件と次のことだ。

「まあ、村民の処置をしなかったと非難されますけどね、任務としては敵が上がる前に私たちは出してしまうんでしょ。迂闊だったかもしれないませんがね、ぜんぜん、敵が上がった後のことを相談してませんものね。私たちは出て行って死ぬんだと。命令が出れば、とにかく舟(④)が出れるようにすることばかり専念して、村の方のことを本当のところ、考えてませんでしたね」

特攻作戦遂行後の住民のことは念頭になかった、これは赤松戦隊長の率直な心情だったろう。

第3戦隊は④という最も重要な武器を米軍上陸前の混乱のなかで自沈させた。慶良間空襲が始まった時の装備は重機関銃2（弾薬1,200発）、軽機関銃6、散弾筒7、小銃152、整備中隊の装備は軽修理車1、小銃45にすぎ

ない。

米軍はB29、グラマンによる空襲、慶良間海峡を埋め尽くした艦艇からの艦砲射撃、上陸後は迫撃砲、高射砲を手あたりしだい撃ち込んだ。第3戦隊の兵員は基地大隊の主力が沖縄本島に移動した2月中旬の時点では、残された勤務隊及び整備隊あわせて216名、戦隊は104名だった。戦隊は持久戦の訓練を受けていない。建前は「志願」だったが、実質はそれを強要された16歳からせいぜい18、9歳の青少年だ。第3戦隊は兵員の3分の1が実戦の経験がなく、その訓練さえ受けていなかった。

とうてい太刀打ちできない装備で、栄養失調死が重なるほどの飢餓状況の第3戦隊は、夜陰に紛れて、せいぜい斬り込みに行くしか、作戦はなかった。6月末には「武装して起き得る者約半数」になり、米軍の攻撃を受けなくても自滅しかねない状況に追い込まれていた。6月23日、沖縄守備軍である第32軍は組織的な戦闘を停止したにもかかわらず、第3戦隊は降伏を決断しなかった。その時点で降伏すれば、7月2日の伊江島住民6人の虐殺、大城教頭の虐殺、8月16日の米軍の投降勧告ビラを持っていた2人の渡嘉敷住民に対する虐殺は起こらなかった。7月10日以降の11人の兵士の栄養失調死も免れた可能性がある。

赤松戦隊長は当時20代なかば、軍の命令は官民にも絶大な影響を及ぼす体制のもとで、渡嘉敷島では最高の実権を握る地位にあった。海上挺進第3戦隊の編成前から㊦の研究に携わり、死をもって任務を完遂する予定だった若い将校に第3戦隊の命運、渡嘉敷、伊江島住民の命運は預けられた、そんな無謀な戦争を日本軍はしていた。

座間味と渡嘉敷の「慰安婦」の写真

手記『沖縄敗戦秘録——悲劇の座間味島』（私家版）を記した宮城初枝さんは、4月12日、右の太腿部を負傷し、17日、米軍に投降し、米軍の野戦

病院で治療を受けた。座間味島は米軍が沖縄で最初に基地を設置した島である。傷が治り始めた頃、歩行訓練のつもりで他の病棟の方に行ってみた。島の同世代の人ならだいたい顔は分かるが、知らない人と出会い、「お互い、よく戦火を生き抜きましたねえ」と声をかけあった。片言の日本語だった。その2人の朝鮮女性は渡嘉敷から来たといった。当時、渡嘉敷島には7人の「慰安婦」の他には朝鮮女性はいなかった。初枝さんが会ったのはミッチャンとアイコだ。ひとりは大腿部に包帯を巻いていた。もうひとりはどこを負傷したのか、わからなかった。

写真1



写真2



写真1 米国立公文書館所蔵の4月21日付の3人の「慰安婦」の写真7枚の中の1枚。慰安所からも激しい戦火からも解放され、満面の笑顔だ。「琉球の座間味島で発見された日本軍朝鮮女性の芸者ガール。日本によってこの島に連れて来られた」とのキャプションが付されている。沖縄公文書館で見ることができる。

写真2 同じく5月18日付の写真。写真1の3人にトミヨと、渡嘉敷から米軍の野戦病院に運ばれたと思われるミッチャンとアイコが加わっている。2016年に沖縄公文書館で公開された。

写真 3



写真 3 米国立公文書館のキャプションでは「日本軍の少佐とともに見つかった芸者ガール、ヘレン・トミオ」。米兵らは英語圏で親しまれているヘレンという愛称をトミヨに贈ったのだろう。写真 2 同様、2016年に沖縄公文書館で公開。

座間味の慰安所の 7 人の女性のうち、人びとに強い印象を残していたのはトミヨとエイコである。トミヨは「将校のつきもの」といわれていた。梅沢裕第 1 戦隊長の「つきもの」だと。

梅沢元第 1 戦隊長の手記「戦闘記録」（『沖縄史料編集所紀要』第 11 号所収）に朝鮮人軍夫とトミヨについて記した個所がある。

「軍司令部は若い将兵を思っか女傑の店主の引率する 5 人の可憐な朝鮮慰安婦を送ってきた。若い将校は始めて青春を知ったのだ」

「基地隊の朝鮮人軍夫百名は壕や陣地構築によく働いたが、敵上陸前夜動揺甚しとの報告を受けた。彼らなりに情報があつた様で、日本の敗戦近しとして投降の徴がある、処刑すべきかとの報告があつたが、日本人でもない彼等は既に戦力にはならぬ、処刑不可、追放せよ

と命じた。彼らはすぐに逃げて行った。前記慰安婦にも軍夫を放すから自由にせよと伝えた。既に日本兵と懇になった者もあり淋し相であった。すぐ米軍に行かず山林中を暫くさ迷った後4名が投降した由。1名が重傷の将校を看取ると云って離れず後2人で手榴弾で自決した。哀話ではないか。女傑の主人は本部と行動すると云い去らず将校軍服を着用して看護に炊事に大いに働いた。後、私が負傷後はつき切りで看護してくれた」

「慰安婦」と朝鮮人軍夫の数は誤りだ。座間味に配置された朝鮮人軍夫は約300名、「慰安婦」は7名だ。

トミヨは女性たちから「おやじ」とよばれていた慰安所の元締めの内妻だった。那覇、慶良間、大東島の慰安所の帳場は、門司で待機していた間、女性たちを監視していた男たちが担った。座間味島だけが例外で、トミヨが帳場になっていた。

奉奇さんは、8月26日、カズコとともに武装解除式に臨んだ後、座間味を経て屋嘉の捕虜収容所へ、さらに民間人用の石川収容所に移された。しばらくしてからそこでトミヨに会った。ひとり是将校と自決し、ふたりは空襲下、身を縮めている時に死亡したといい、生き残った3人と石川収容所にいると語った。日本兵といっしょに屋嘉収容所にいる「おやじ」に会いたい、米軍がなかなか会わせてくれないとも話していた。

米国立公文書館所蔵の座間味島の3人の「慰安婦」の写真は沖縄県立公文書館で見ることができる。さらに、2016年、同館でトミヨの写真ともう1枚の写真が公開された。トミヨと座間味の3人にミッチャンとアイコと思われる少女が加わった写真だ。6人のうち3人は高校生ぐらいの年齢だ。1944年11月から1945年3月23日、慶良間空襲が始まる直前まで、将兵の酷使に耐えた女性たちである。

裴奉奇さんは1991年10月に亡くなった。金学順さんら「慰安婦」にされた韓国の女性3人が軍人・軍属及びその遺族らとともに日本政府に謝罪と補償を求めて東京地方裁判所に提訴したのは同年12月6日だった。東京の韓国YMCAで行われた集会ではじめて学順さんの凛とした証言を聞いた時、私は奉奇さんの遺志は引き継がれたと確信したものだ。以後、韓国だけではなく、フィリピン、台湾、オランダ、中国、インドネシア、マレーシア、東チモールなど、日本軍「慰安婦」・性暴力を受けた多くの女性たちが名のり出た。

奉奇さんの半生と、奉奇さんといっしょに慶良間の慰安所に連行された少女、女性たちの足跡を辿った拙著『赤瓦の家』は中間発表のつもりで発表したことは冒頭で述べたとおりだ。奉奇さんらといっしょに複郭陣地跡と、渡嘉敷の人びとが「玉砕場」と呼んでいた谷間に行ったのは終い焼香の跡が残っていた1979年2月だった。その谷間に30数年ぶりに赴き、遅まきながらやり残していた取材にとりかかった。第3戦隊が犯した住民虐殺や米軍による伊江島住民の渡嘉敷島への強制移住の一端については貴重な証言が得られたと感じている。奉奇さんの証言とぴったり一致する慰安所から解放されてまもない少女、女性たちの写真が沖縄公文書館で見られることに気づいたことも私にとってはひとしおの成果だった。だが、しかし、この作業にもう少し早くとりかかっていたら、さらに大きな成果を得られたことに気づいた。それは、沖縄の慰安所から韓国に帰った女性たちの証言を聞く作業だ。昨年（2015年）、友人を通して韓国挺身隊対策協議会に沖縄から帰ったハルモニはいないか、問い合わせた。数人いたが、亡くなられたり、高齢で証言を聞くのは難しいとのことだった。記録に残すべき証言を聞く機会をうかつにも見過ごしてしまった失態に愕然としている。